

江戸の坂道散策

新連載 胸突坂 (文京区)



山野 勝 Yamano Masaru
坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務め、現在講談社顧問。この数十年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。『タモリのTOKYO坂道美学入門』(講談社)に企画参加。著書に『江戸の坂 東京・歴史散歩ガイド』(朝日新聞社)がある。

文京区の関口二丁目と目白台一丁目の境に「胸突坂」という古坂がある。この坂はあまりにも急峻なので、胸を斜面と平行に突くようにして歩かなければ上れないところから名づけられた。鬱蒼と繁った樹林の間を駆け上る姿は雄大で、いつも壮快な気分にしてくれる。

坂下の駒塚橋の下を流れるのが神田川。古くは江戸川と呼ばれた。江戸時代には、少し下流に大洗堰が設けられ、神田上水の取水口になっていた。水戸藩邸(現後楽園)を経て、神田・日本橋方面に飲料水を供給していたのだ。坂下西側にある水神社は神田上水の守護神で、胸突坂の別名を水神坂ともいう。

坂下の東側には関口芭蕉庵がある。俳人・松尾芭蕉は伊勢津藩・藤堂家の近習だったが、延宝五(一六七七)年から三年間、神田川の改修工事に現場監督として従事した。このとき住んでいた小庵が後に芭蕉庵と称されるようになったという。芭蕉が深川へ移り、「奥の細道」の旅に出る以前のことである。園内には芭蕉堂や、「五月雨にかくれぬものや瀬田の橋」の短冊を埋めて墓とし

た「さみだれ塚」などがある。

坂を上っていくと、東側には明治の元勳・田中光顕邸(現蕉雨園)と山県有朋邸(現椿山荘)が深い森に包まれている。坂の西側は肥後熊本藩・細川家の下屋敷跡で、和敬塾・新江戸川公園一带を含む広大な敷地だった。細川家所蔵の美術品を集めた永青文庫が公開されている。二三区内には五つの胸突坂があるが、この坂ほど優雅で江戸の情趣を残した坂はない。正に名坂である。



こうら坂 一服茶屋

千代田区富士見、暁星学園脇にある「二合半坂」の坂名の由来はおもしろい。この坂の高台からは、富士山と日光山(男体山)がよく見えた。富士山の高さを十合とすると、日光山は五合の高さだったが、その上部の半分しか望めなかったので二合半というわけ。また、一合の酒を飲んでも、この急坂を上ると二合半の酒を飲んだほどに酔ったからともいう。別名をこなから(二合半)坂という。